

生物基礎，生物

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

生物基礎

1 前 文

「生物基礎」は、日常生活や社会との関連を考慮し、科学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解と、それらを活用して科学的に探究を進める過程についての理解などを重視する科目である。(共通テスト問題作成方針より)

今回の受験者数は301人であり、昨年度より52人減少し、全受験者数の19.6%であった。理科の他の基礎科目と比較すると最も受験者数が多かった。

なお、評価に当たっては、報告書(本試験)14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

昨年度に引き続いて、知識を活用させたり知識の定着や理解の質を問うたりする問題が多く出題されており、設問作成方針に沿っていたと思われる。思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問も各大問に含まれていた。また範囲については、「生物基礎」で扱われる学習範囲からほぼ偏りなく出題されており適切であった。しかし、探究的な実験を扱った設問の取り扱いがやや多く、それについては慎重な検討が必要であると感じられる。そこで、この懸念に係り第2問Aについてまず取り上げたい。

第2問Aは、高校の授業で行われる探究的な実験の過程を想定した設問であった。作図を用いたデータ解析や研究計画の立案など、探究的な実験の過程を再現できていると感じられる。しかし、すべての設問で理科の一般的な思考力・判断力・表現力等によって正答を得ることができ、生物基礎で身に付けた概念や知識との関連が弱かったと思われる。「理数探究基礎」として出題されるタイプの設問であるように感じられる。このような出題は多くとも中間のうち1問程度に抑えるように配慮していただきたい。以下ではその他の設問について個別に触れる。

第1問Aは、教科書レベルの知識を活用したり実験計画について簡単に考察したりする設問で良問がそろっていた。問2は、実験計画について簡単な考察力を問う設問であった。しかし遺伝子発現の基本的な流れやATPの代謝回転等の、生物基礎で扱われる知識の理解については問われていないと感じられる。そのため生物基礎の学力が得点に反映され難い設問であったのではないだろうか。知識を活用できれば得点に結び付くような工夫が加味されるように配慮していただきたい。上述の第2問Aだけでなく、「生物基礎」で習得した知識・理解を必要としない」問いの出題割合が全体的にやや多かったように感じられる。一方問3は、暗記による知識の確認に留まらず知識の活用を問うており、背景となる知識は授業や教科書でも必須として扱われることが多いので、良問であったと感じられる。また第1問Bも、教科書レベルの知識を問う設問と表を読み取って簡単な計算を求める設問で構成されおり、全般的に良問であったと言える。しかし問5については、遺伝子発現や複製における分子生物学的な詳細は「生物基礎」でほとんど扱われず、二重らせんが緩んだりすることなどについても学習の機会が少ないので、正解の選択肢の記述内容は学習範囲をやや逸脱していたのではないかと思われる。一方、問6の題材は授業や教科書で頻繁に扱われているものであ

った。正答を得るためには多少の計算を伴う考察が必要だが、「生物基礎」で習得した知識の活用が背景にあるため、計算の結果をその知識に照らして受験者が検討することができる良問であったと言える。

第2問B問4は、内分泌線が上位と下位の中枢に二重支配されている知識の定着を問う設問であった。知識の活用を問うことができている優れた出題であると言える。問5は、与えられたデータを読み取って思考力、判断力、表現力等を発揮することが求められる設問であった。特定の代謝や生理作用を抑制したり促進したりする物質の作用は、「生物基礎」を通して学習したり考察したりする機会が多い内容であるので、共通テストにふさわしい良問であったと思われる。

第3問Aには直線的に知識を問う設問は含まれず、知識を整理・活用し、知識と理解を背景に示された調査の結果を解釈する設問によって構成されていた。「生物基礎」で習得した概念にかかわらず図の読み取り能力を問う設問はA問2のみで、出題バランスはこの程度が適当だと思われる。問2は、平易なグラフの読み取り問題で、選択肢も平易であった。しかし陽樹と陰樹の違いについて、及び攪乱と生物多様性の関係についての概念が背景にある設問なので、「生物基礎」の出題として好ましい良問であると感じられる。第3問Bは、「生物基礎」で身に付けるべき知識を正しく理解している受験者には解答しやすい設問であったと考えられる。思考力、判断力、表現力等を発揮することを求める場合も、このように「生物基礎」の授業が背景となるように十分配慮していただきたい。一方、特定の栄養段階と特定の動物を多くの高校生は単純に結び付けているので、問3では出題の意図にかかわらず④が簡単に除かれてしまったのではないかと感じられる。

3 分量・程度

今年度は、大問数は3で、大問ごとにA、Bの中間が設定される形式であり、小問数は合計16、解答数は合計18であった。大問数、中間数、小問数及び解答数は昨年度と同じであった。ページ数に関しては、昨年度より3ページ減って15ページであった。

設問数や各設問の文字数などは適当な分量であったと思われる。目新しい題材を取り扱う場合も本質的には平易な内容に仕上がっており、個別の設問の難易度も適切であったと思われる。平均点は昨年度と比較して1.3点低かったが、ほぼ昨年度と同様の難易度であったと思われる。また、本試験と比較して2.2点低かったが、難易度に本試験との大きな差異は生じなかったと思われる。

グラフを作図させたりデータを解析させたりする設問の分量が全体としてやや多く、受験者は解答時間が不足したのではないかと感じられる。さらに計算問題や思考力・判断力・表現力等を問われる設問では、受験者が複雑な思考の過程を要求されるため、設問数や見た目の文字数から感じられる以上の解答時間が必要となるのではないだろうか。個々の設問では目立たなくても、全体としては解答時間が不足してしまうという結果を招いたであろうと感じられる。

第1問A問1は、「過不足なく」選択する設問であったが、基礎的な知識をシンプルに問う良問と言える。「生物基礎」で「過不足なく」問う場合には、この程度の難易度が適当だと感じられる。第1問Bは知識を問う設問の難易度が工夫されていて、良問と言える。しかし問4は問1とほぼ同じような設問で、同一の大問中で続けて二度にわたり問われたことは、やや疑問に思われる。この問4だけ独立に見ると「生物基礎」の共通テストらしい良問であったと言える。問5は知識の活用を問う設問であり、扱う内容は範囲外とまで言えないもののやや難しいと感じられる。しかし選択肢が明快で必須知識を含んでいるため、正答率は高かったであろうと思われる。「生物基礎」で扱われる知識問題の難易度レベルとして適当な良問であったと感じられる。

第2問Aは本質的に平易な設問で、理科の基礎科目で身に付けるべき学力を問うことができている。

と思われる。問1は基礎的なデータ処理能力を問う設問であった。しかし、ほとんどの受験者が文系選択であったろうことを考慮すると、このようなデータ解析を苦手としがちであることから、対象の受験者には難問となったことが推察される。理科の基礎を付した科目を通して習得が期待される能力を測ることができる設問であるが、それが他科目ではなく「生物基礎」の共通テストに求められるのかについては十分配慮していただきたい。問2と問3についても問1と同様で、本質的に平易な設問であり、共通テストで出題が期待されるレベルの内容であると感じられる。問4では、「生物基礎」の学習内容としては複雑な概念の習得を必要とするうえ、正答の選択肢が「すべてを含む」ので心理的に避けられる傾向があったと推察され、正答率が押し下げられたのではないかと感じられる。問5は、やや複雑な設問で解答に時間が必要であったと考えられる。しかし本質的に平易な内容であるので、「生物基礎」として適当な難易度レベルに落ち着いていたと思われる。

第3問は全体的に平易な設問であったが、多くの受験者にとって手強かったと思われる第2問との組合せを考慮すると、適当であると感じられる。A問1では、①～③が本質的にかなり平易な内容を含む選択肢であるため、「過不足なく」選択によって難易度がうまく調整されていた。B問3と問4は共通して選択肢がやや教科書的過ぎるため、学力の高い受験者には易しかったであろうと推測される。つまり、図2と図3を検討しなくても、選択肢から「それらしい」正答が選べてしまう設問であったと言える。選択肢の内容について、図の参照が解答に必要なように留意していただきたい。問5もこの点において同様で、出題内容にかかわらず良く似た設問に仕上がっていると感じられる。選択肢だけから正答を選べる設問が連続しないよう配慮していただきたい。

4 表 現・形 式

探究的な実験など学習の過程を意識した場面設定の設問が含まれており、教科・科目の本質に照らし全体に適切であったと言える。文章表現や用語も適正で、図表の扱いも適切であった。しかし、先の項目で触れた通り全体に長大になり、多くの解答時間を要するように変化している「生物基礎」の共通テストには、「物理基礎」など他科目と同様に、部分点の配置を更に積極的に取り入れることを検討していただけるようお願いしたい。それによって、受験者の時間的な負担を減らし、じっくり思考問題に取り組みさせることができるであろうと思われる。

第1問Aのリード文は興味深いですが、やや設問のための設定で、冒頭の設問としては受験者の興味や関心を喚起する効果が低かったかもしれないと感じられる。「生物基礎」ではもう少し現実の場面に則した設問の場面設定となるよう配慮していただきたい。A問3の概念図は、「生物基礎」のような基本的な概念の習得を目的とする科目の試験には適当であると感じられる。本問の概念図は優れた出来栄であり、今後もこのような出題を継続していただけるよう留意していただきたい。

第2問Aは高校の授業で行われる探究的な実験の過程を想定した設問であり、その観点から好ましい出題と言える。Bは、簡単な知識の活用と、データの読み取り及び考察力を問う設問であった。問4は、多くの受験者にとってやや難問であったと推察されるが、知識の定着の有無をうまく問う良問であったと言える。本問のような場合は、積極的に部分点を導入することを検討していただきたいと感じられる。たとえば、内分泌の上位中枢が視床下部であるという知識理解は、相対的に理解度が高いと思われるので、⑤の選択肢にも得点を設けると良いのではないだろうか。このような工夫は、全体として「生物基礎」が選択率を高めることにつながるとと思われる。

第3問A問1については、①～③それぞれの選択肢についての理解は独立したもので、④だけでなく、二つの選択項目についてのみ正解となっている①、②、⑦にも多少の部分点を与えるように配慮していただきたい。Bは、日本における生態系保全の象徴的な動物であるトキを題材にした設問で、学習の意欲などを喚起することに貢献する良問であると言える。

5 ま と め（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは、昨年度の第1回共通テストやこれまでのセンター試験と比べて共通テストの作問の作成意図をより反映したものとなっていた。しかしながら、共通テスト本試験の「生物基礎」と比較すると、これまでのセンター試験の出題傾向にある程度近く、受験者・教員にとってはなじみやすいものであったと推察される。

また、共通テスト本試験と同様に、高等学校での基本的な知識・技能を活用し、受験者自らが主体となって学ぶ探究的な学習の重要性を示唆しており、今後もその傾向は更に増加していくものと考えられる。これまでの教師主導の「教える」一斉授業から、探究的な学習を日常の授業の中で実践していく「学び取る」授業へのパラダイムの変換が求められており、早急な授業改善が望まれる。

○意見・要望・提案等

今後の試験問題の作成に対し、以下の提案・要望を行う。

来年度への意見・提案・要望に関しては、令和4年度共通テスト本試験の「生物基礎」と同様であり、以下のとおりである。

- ・自然現象に興味をもち、日頃の授業を大切に学習を進めることにより、その成果が正しく反映される基本的な知識問題と、生物の知識を基に、与えられた情報を読み取り生命現象を分析・考察する思考問題が、バランス良く出題されるようお願いしたい。
- ・思考力、判断力、表現力等を問う設問では、「生物基礎」の知識を基本とし、それを活用・探究することで、科学的なものの見方や考え方が正しく評価できるよう問題作成をお願いしたい。
- ・「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」「地学基礎」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、問題の難易度を調整していただきたい。
- ・最後に、今年度の共通テストが、昨年度の第1回共通テストやこれまで長きにわたり実施されてきたセンター試験、さらには、今後の受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮をもって作成されてきたこと、本委員会の提案を受け、改善に向け、真摯に取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。

今年度の共通テスト追・再試験は疾病、負傷等やむを得ない事情により、令和4年度共通テスト本試験に定める期日に受験できない受験者を対象に実施されたが、次年度以降においても、各受験者の事情を考慮し、本試験と追・再試験の難易度に大きな差異が生じないように配慮をお願いしたい。

生 物

1 前 文

「生物」は、科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見出したり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する科目である。（共通テスト問題作成方針より）

今回の受験者数は226人であり、昨年度より57人減少し、全受験者数の14.7%であった。

なお、評価に当たっては、報告書（本試験）14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

出題の内容は各分野から偏りがなく出題されていた。特に、現行の学習指導要領の章立てにとらわれない、いわゆる融合問題が多く出題されており、日常の学習における、生物学の多面的な理解を促すメッセージ性が感じられた。

内容については、探究的な要素の強い設問や、日常的な生活に関連した設問に加え、生物学の新たな知見・題材に基づく、受験者の興味・関心を喚起するような題材を元にした設問があり、共通テストの趣旨にのっとったものであった。

個別の設問で見ると、第1問問2は、リード文からの情報と、図から分布の状態や個体数を読み取り、問題文に沿って分析をする点など、よく練られていた設問であった。一方、選択肢中の「集中分布」「ランダム分布」の語句は、ある教科書では「参考」扱いである。同様な例として、第3問問2の②中の「羊膜」、第4問問5の選択肢中のウ「競争的排除（競争排除）」も、「参考」ないしは記載のない教科書があり、選択肢として扱う語句は慎重に吟味されたい。

第2問Bは、被子植物の花器官の分化とABCモデル、遺伝子の転写調節を組み合わせた融合問題で、ABCモデルについての知識を活用して考察する設問であった。問5は、解析すべき事柄について複数の可能性に気づかせる設問で、発現調節の理解を問う問として適当である。一方、問6は、花器官の構造（外側から、がく片、花弁、おしべ、めしべ）とABCモデルの抑制関係、花粉母細胞（おしべ）と胚のう母細胞（めしべ）を関連させて考察させる問であったが、「C遺伝子のみはめしべに、C遺伝子+B遺伝子ではおしべに分化」という、ABCモデルの抑制関係を正確に把握していないと正答できない設問であり、「これは絶対必要な『知識』で、A～Cクラスの遺伝子の影響する位置を覚えておく必要がある・・・」などと、些末な知識を求める方向に学校現場をミスリードしてしまう可能性が懸念される。

第3問問3は、脊索動物の生殖方式についての設問で、選択肢の内容が表1に示した事例と合致するかどうかを、基礎知識を基に考察させる、という設問のねらいは評価できる。動物の生殖方法については、中学校理科で学ぶこと、また、そもそも「生物」を選択し受験する受験者は、いわゆる「生き物好き」として生物に対する興味関心が高いと考えられ、この設問は比較的平易に解答できたと思われる。一方で、表1の脊索動物の生殖の様式を入れたことが、かえって思考の妨げとなった受験者もいたのではないかと推察される。特に、ウミタナゴ、ヌタウナギなどといった、普段あまりなじみのない生物名にとまどい、この問いへの解答を止めてしまった受験者もいたのではないだろうか。さらに、現行の教科書を見ると、各種の脊索動物の受精方法の記載は少ないか、もしくは記載がないものもある。前述第1問問2について述べた部分と重複するが、出題のテーマや用

語については、学習指導要領に準拠するとともに、学習指導要領解説及び高等学校で使用されている教科書を基礎とし、特定の事項や分野に偏りが生じないように、引き続き十分な配慮をお願いしたい。同問5は、受精卵における Ca^{2+} 波の発生とイモリの多精受精を題材に、グラフとリード文から考察する問であった。最新の研究や新発見を取り上げ、今後の生物への興味関心を導く取り組みとして評価できるが、教科書に記載のない事例を取り上げる際には、授業で学んだ知識や経験を活用して解答できるような設問作成を期待したい。また、この設問は、数学Aで学ぶ確率の考え方の活用をねらった設問と見ることができるが、単に測定値の合計や確率を求めるだけで終わってしまうのではなく、求めた結果や数値から、生物学的な考察を導くような設問をお願いしたい。

第4問は、水族館を訪れた高校生の会話を題材に、進化、系統、生物の相互作用等に関する融合問題で、知識を問う設問、知識の活用を問う設問、表・グラフを読み取り考察する設問がバランス良く配置されていた。

第5問問4は、大気中の酸素濃度の変遷と地球と生物の歴史について考察する設問であったが、生物の歴史において、単純な知識を問うのではなく、知識を活用し、グラフから考察させる良問であり、今後の作問の方向として歓迎したい。

第6問問1は、グラフから個眼のいき値と光の強さ(入力)に応じた興奮の頻度(出力)を求め、文章に示された個眼同士の影響を踏まえて、結果を導く設問で、提示された情報を統合して考察する力が問われた。さらに、問2では、問題文を基に興奮の頻度が出力されるメカニズムを考察することができ、大問の最初に示した、ヒトの明るさの感じ方の理解に回帰するストーリー性が感じられ、生物学の楽しさを感じ取りながら取り組めた面白い設問であったと思われる。あえて付け加えるならば、現象把握(ア・イ)とメカニズムの考察(ウ)とを分離させ、別の設問に仕立てた方が設問の構成としてより良かったのではないかと思われる。

3 分量・程度

今年度は、大問数は6で、大問2のみA、Bの中間が設定される形式であった。小問数は昨年度より1増えて合計27、解答数は昨年度より2増えて合計29であった。ページ数に関しては、昨年度より3ページ減って29ページ(下書き用紙ページを除く)であった。昨年同様選択問題のない大問6問構成であった。

全体としての分量は、前述のように、ページ数は昨年に比べ減少したが、そもそも全設問を通じ、リード文、問題文ともに文章量が多く、じっくりと考える時間が取れなかったことが推測される。特に、第2問Aなどは、実験の図や表が2ページにわたっており、実験の方法、計測の方法などを把握するだけで多くの時間を費やしたと思われる。

全体として難易度は高かったと言えるが、難易度を高めた理由が、設問そのものの難しさによるものなのか、それとも分量自体が多く解ききれなかったためなのかの評価は非常に難しい。大問単位で見ると、それぞれの設問単位では、図、グラフ、資料を読み取り、科学的に考察するという、思考力、判断力、表現力等を問う良問も少なくない。一方、見方を変えれば、全ての大問で長文の読解力が求められ、初めて目にすると思われる実験とその結果や資料を読み取り考察する、文章もデータ、資料も細かい読み取りが必要で正解に到るのが難しい。設問パッケージ全体として考えたとき、テキスト量の多さと読み取りの時間の多さに対し、考察・思考に費やす時間が保障されていたとは言い切れない。特に第3問までは非常に時間が掛かり、最終の第6問までたどり着けなかった受験者が多かったのではないだろうか。学習指導要領や共通テスト作問方針の求める思考力、判断力、表現力等は、限られた時間の中で高速に情報を処理し判断するといった能力ではないはずである。教科書に基づいて真面目に学び養われた受験者の学力を測る試験になっているのか、十分

に考慮していただきたい。

個別の設問で見ると、第1問問4は、遺伝子頻度の理解と計算を組み合わせた設問だったが、遺伝の計算についての記載は教科書から減少する傾向にあり、自家受精を繰り返すという計算は、慣れていない受験者には難しい問となったことが推測される。リード文や空欄の数などの工夫により、受験者の思考を導くように、難易度を調節することもできたかもしれない。また、計算結果そのものを求めるのではなく、計算から得られた頻度から分かることを問う形であれば、更に思考力、判断力、表現力等を問うということが明確になったのではないだろうか。

4 表現・形式

会話文を用いた設問は第4問の1題だけだったが、会話文中のトピックスが各小問に上手くつながっていると感じた。会話文の多用は、いたずらに文章を長くし、出題の意図やねらいをぼかしてしまうデメリットも考えられるので、今回の出題数・使用状況は適当であると思われた。

「過不足なく」選ぶ解答形式については、今回は四つの小問でこの解答形式が用いられたが、二つの理由で、この形式における部分正答の扱いを積極的に導入することが望ましいと考える。第一に、例えば、第2問問3は植物の環境応答についての問いだが、①～④までの四つの文の中から正しいものを過不足なく選ぶことが求められている。配点は、正答が4点、誤答が0点の設定で、部分正答は設定されていない。つまり、四つの文全てを正しく判別した受験者のみが得点し、三つ、二つ、一つの正答を判別できていた受験者は全く評価されないことになってしまう。教育的な配慮の視点に基づいた、受験者の力を丁寧に測る方法として、部分正答の導入が望ましいと考える。第二の理由として、テキスト量を減らし解答時間すなわち思考する時間の担保が期待できる。共通テストの作問姿勢が、科学的に考察する思考力、判断力、表現力等を問うことが大前提であることは言うまでもない。しかし、テキスト量の増加が解答時間の減少、すなわち思考する時間を保障できていないことの要因であるとするならば、設問数を絞る必要がある。一方で、小問数（解答数）を減らせば、1問あたりの配点が大きくなり、1問の正誤が大幅な得点の増減をもたらす、試験の精度の低下を招くことにもつながる。このジレンマを解消する方法として、「設問数（解答数）を減らすとともに、一つの間の中での部分正答を拡大することで、一つの間にてう時間を担保しつつ、試験の精度を維持する」ことが期待できるのではないだろうか。以上二つの理由から、「過不足なく」を選ぶ解答形式における部分正答の扱いを、積極的に導入することを提案したい。

個別の設問で見ると、第1問問4の表現について、「まず」、「このとき」、「ここで」など時間的な要素が文に入っていることで、問われている対象が何であるかが分かりにくい。「ここで」が「この個体群において」など、指示語が何を指しているのか明確に示すような表現になるよう留意していただきたい。

第2問Aでは、はじめに実験方法が二つの図によって示されていたが、この二つですんなり実験装置と実験方法を理解できた受験者は少なかったと推察される。二つの図に加え、実験装置の立体的な外観や、斜め方向から見た透視図などが示されていれば、更に理解しやすかったのではないかと思われる。

第4問問5では、P73のリード文5行目「実験前の体長が平均値よりも低かったランク3は…」から7行目「どうして、ランク3はほとんど餌を食べて成長しないのかな」の間に「なぜ成長量を調節する必要があるのだろうか」というような一文があれば、受験者は設問の意図をより理解しやすかったのではないかと思われる。

5 ま と め（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは、昨年度と比べても共通テストの作問の作成意図をより反映したものとなっていた。特に、実験結果から合理的な推論のみを的確に考察するなど、高等学校での基本的な知識・技能を活用し、受験者自らが主体となって学ぶ探究的で深い学びへの改善を昨年度に増して強く示唆しているものと考えられた。教師主導型の授業から受験者が自ら学ぶ受験者主体型へ、さらには数的処理を含む探究的な学習を日常の授業の中でどう実践していくのかについて、パラダイムの変換が求められており、早急な授業改善が望まれる。

○意見・要望・提案等

来年度への意見・提案・要望に関しては、共通テスト本試験の「生物」と同様であり、以下のとおりである。

- ・自然現象に興味を持ち、日頃の授業を大切に学習を進めることにより、その成果が正しく反映される基本的な知識問題と、生物の知識を基に、与えられた情報を読み取り生命現象を分析・考察する思考問題が、バランス良く出題されるようお願いしたい。
- ・思考力・判断力・表現力等を問う設問では、「生物」の知識・技能を基本とし、それを活用・探究することで、科学的なものの見方や考え方が正しく評価できるよう問題作成をお願いしたい。
- ・「物理」「化学」「生物」「地学」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、設問の難易度を是非調整していただきたい。
- ・最後に、今年度の共通テストが、昨年度の第1回共通テストやこれまで長きにわたり実施されてきたセンター試験、さらには、今後の受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮をもって作成されてきたこと、本委員会の提案を受け、改善に向けて真摯に取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。

今年度の共通テスト追・再試験は疾病、負傷等やむを得ない事情により、共通テスト本試験に定める期日に受験できない受験者を対象に実施されたが、次年度以降においても、各受験者の事情を考慮し、本試験と追・再試験の難易度に大きな差異が生じないように配慮をお願いしたい。